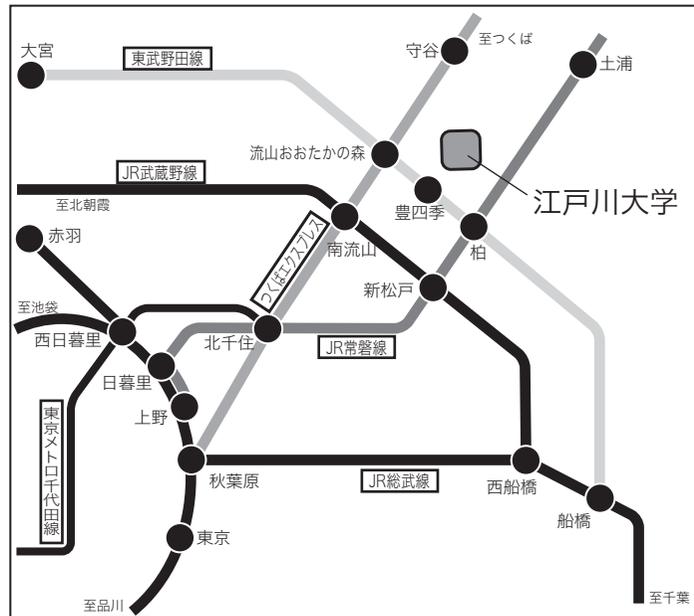


## ● 江戸川大学 駒木キャンパスへの交通案内



- ・ 上野駅から常磐線「柏」駅まで快速で約30分。
- ・ 柏駅から東武野田線「豊四季」駅まで約5分。
- ・ 秋葉原駅からつくばエクスプレス「流山おおたかの森」駅まで快速で約25分。

## ● 付近略図



- ・ 柏駅西口東武バス2番乗り場から、高田車庫行き、柏の葉公園行き、または国立がんセンター行きで、約8分「梅林」下車、徒歩5分。
- ・ つくばエクスプレス「流山おおたかの森」駅から無料スクールバス約5分。
- ・ 東武野田線「豊四季」駅から徒歩12分。
- ・ 常磐自動車道、柏IC・流山ICより約10分。

日本イェイツ協会

第47回大会  
プログラム

2011

10月29日(土) ~ 10月30日(日)

会場  
江戸川大学

〒270-0198 千葉県流山市駒木474

TEL 04-7152-0661

日本イェイツ協会事務局

〒350-0295 埼玉県坂戸市けやき台1-1  
城西大学語学教育センター 小堀研究室内  
TEL 049-271-7617 FAX 049-271-7983

10月29日(土)

於 メモリアルホール B棟 1F

9:30~10:00 受付

10:00~10:30 挨拶

日本イエイツ協会会長  
江戸川大学学長  
アイルランド大使

司会 小堀 隆司  
松村 賢一  
市村 佑一氏  
HE John Neary

10:30~11:30 【講演】

刹那を引き延ばすこと

司会 虎岩 正純  
吉増 剛造氏

11:30~12:00 【研究発表】

吉増剛造におけるイエイツ

司会 山崎 弘行  
松田 誠思

12:00~13:00 昼食

総会

司会 太田 直也

13:00~14:30 【研究発表】

‘Easter1916’と報道写真の衝撃  
文体・個性・仮面 — イエイツとワイルド —  
エピファニーの構図 — Wordsworth と Heaney —

司会 木原 誠  
柿原 妙子  
薦田 嘉人  
江崎 義彦

14:30~17:30 【シンポジウム】

「Form、あるいは詩的であること：イエイツの場合」

司会・構成 長谷川弘基  
小菅 奎申  
西谷茉莉子  
塩田 英子

18:00~20:00 懇親会 (会場 江戸川大学サテライトセンター)

司会 海老澤邦江

10月30日(日)

於 サテライトセンター

9:30~10:30 受付

10:30~12:00 【研究発表】

マイケル・ロングリー『雪水』に見る  
やさしい自然の表裏:共生と葛藤

司会 佐藤 容子

水崎野里子

ドルイドの受容のかたち — イエイツとブレイクの場合 —  
岡崎 真美

解体と連鎖 — マルドゥーンの *Maggot* について —

奥田 良二

12:00~13:00 昼食

13:00~16:00 【ワークショップ】

「Yeatsにおける放浪」をめぐって

司会・構成 伊達 恵理  
浅井 雅志  
虎岩 正純

16:00 閉会の辞

鈴江 暲子

開催場所

10月29日(土) 江戸川大学駒木キャンパス(メモリアルホール B棟 1F)

10月30日(日) 江戸川大学サテライトセンター

(ライフガーデン流山おおたかの森 2F / 流山おおたかの森駅に隣接)

10月29日(土)

## 利那を引き延ばすこと

吉増 剛造

「イエイツが伝へてきたこと」と題しての講話をさせていた  
 だきましたのが十七年前の晩秋……  
(たしか神田の中央大学駿河台記念館  
 で、第三十回の折でしたが、……)

それもまだ、貧しく、心細い夢の中径なかみちであつたようです。利那

を引き延ばすこと”(イエイツ『神秘の薔薇』大久保直幹氏訳)を、隣の風土で、……違つた

仕草で、僅かな力によつてですが、“変奏をすること”という言葉

葉が当たっているのかも知れない、その結果を、……”果

(fruit or) ……”と呼ぶにはあまりにいびつなものかも知れませ

んが、「写真集」(In-between) 映像 (gozo Ciné) 、そして、も

しかすると、これがイエイツの「ヴィジョン」の下底にも、あ

るいは交響をしようとしているものなのかも知れない、「裸の

メモ」(二葉カラー)をお手にしていただいて、イエイツの詩の芯

(core)の継承を、十七年を経て、ご報告をすること、その試

みになることでしょう。(2011.8.17)

## 吉増剛造におけるイエイツ

松田 誠思

吉増剛造がイエイツについてまとめた所見を述べているのは、講演草稿「イエイツが伝へてきたこと」<sup>1</sup> だけであるが、詩の本文とか自注で言及している例は少なからずあり、時に座談の話柄にもなっていて、イエイツがエミリー・ディキンソンとともに、彼の愛読するきわめて重要な詩人の一人であることはまちがいない。吉増にとってイエイツは、詩の言葉を紡ぐ名匠であり、音と色彩の微妙なゆらぎをともなって心情の機微を映し出す、その言葉のリズムに鋭敏に反応するとともに、自らの詩作への強い刺激を受けていると言えよう。しかしイエイツにたいする彼のインティメットな親近性は、もう一つ深い層における「詩」 poesy の共有感・響き合いに根ざしていて、それは柳田国男の文業への親炙を通じてつちかわれた。柳田国男は、長年にわたって詩的感受性を磨く吉増の旅の導師であり、表現行為の可能性を探究する過激な精神運動の深みにつねに下ろされている測鉛であって、その消息は次のように語られている。

「私たちの眼が届くところ、耳が届くところ、あるいは歩いて行って手を伸ばせばさわることのできる場所、あるいは釣竿の先に針と糸をつけて釣竿を振れば、その先の水面に水しぶきがあがる場所、その範囲内で起こることの大事さ…そこで起こることが生きていくこととどれだけ密接に親和しているか。」(「柳田国男—詩人の魂」<sup>2</sup>) 一人ひとりの人間の生命の輝きと重み、そのユニークな味わいが、神話や歴史によって侵食され、現実主義の暴力によって奪われ消滅することへの痛みが、柳田を民俗学的探求へと駆り立てた。それを受け継ぐべきは民俗学者だけでなく、詩人の役割でもあるのではないか。古代から現代にまで続く「生命の糸」を過たず見きわめ、そこにささやかな一本の糸を加えるには、身体的思考とか内臓的直観力を取り戻さねばならない。吉増剛造が柳田国男から受け継ぎ、詩人として実践しようとしている立場に、私たちはごく自然にイエイツの所信を重ねていくつもの詩を思い浮かべることができる(‘To the Rose upon the Rood of Time’、‘The Fisherman’、‘The Tower’、‘Crazy Jane’ poems、‘The Circus Animals’ Desertion’ など)。

このような吉増剛造の示唆を導きの糸として、自らを吟遊詩人に擬したイエイツが、詩人の置かれている状況と役割をどのようにとらえていたかを、最晩年の詩「クロンウエルの呪い」(‘The Curse of Cromwell’) を取り上げて考察する。

- 1 吉増剛造「イエイツが伝へてきたこと」(『イエイツ研究』26、日本イエイツ協会、1995。「イエイツが伝へてきたこと」と改題し、『剥きだしの野の花』に再録、岩波書店、2001。)
- 2 吉増剛造「柳田国男—詩人の魂」(『NHK 知るを楽しむ：私のこだわり人物伝 2-3 月』、日本放送出版会、2006。)

## ‘Easter 1916’ と報道写真の衝撃

柿原 妙子

‘Easter 1916’の前半において復活祭蜂起を起こした知人たちを指すとき、イエイツが固有名詞を用いず、ひどく素っ気ない呼び方をしている理由について、これまで批評家が示してきた解釈は十分なものだろうか。このような呼称は、事件の勃発時にイエイツがイギリスにいて蜂起を報道する新聞を買い求めた事実と関係があるのではないか。つまり第1連の「彼ら」も第2連の「あの女」「この男」も、新聞の写真を指差しながら傍らにいるイギリスの知人に説明しているからだと考えれば、その即物的な物言いについて納得することができそうである。

本発表では、ロラン・バルトの写真論を援用しながら、写真というメディアから連想される<変身>と<不動>とをキーワードとして、この詩を読み直してみたいと思う。第1、第2連で新聞を指差しながら知人に説明しているイエイツは、写真の中で彼らが生きていながら不動のものに変身したと感じたのではないか。その印象が第3連の動かない石の情景となった。石に変身した「彼ら」は不変を目指したはずなのだが、気がつけばまわりの自然にいつのまにか取り込まれている。刻々と変化する自然こそが実は変化せずに永遠に続くものであることを、両者を対比させながら第3連は示唆している。

本来であれば、蜂起という暴力的行為はイエイツにとって心からは支持できないものだった。しかし、彼は川の中の石となった彼らと詩人である自分との間に夢に殉ずるという共通点があると感じ、彼らの死が<平板な死>として歴史から消え去るのを防ごうとした。最後に「彼ら」の名を石のモニュメントに刻むように作品中で呼び上げることで、自然によって彼らが変わられる前に詩人である自分が彼らを変身させようとしたのである。

19世紀末、唯美主義の思潮のもとに反写実主義を標榜したオスカー・ワイルドにとって、芸術作品とは自身の想像力によって構築された美的世界だったといえるだろう。現実、社会、道徳、自然の影響を免れて、自律的に完成された世界が作品として形作られるとき、芸術家の主観は客観化されなければならない。彼にすれば、自らの内面に客観的統一性を与えるものこそ、文体（スタイル）にほかならなかった。「スタイルのないところに芸術はなく、統一のないところにスタイルはない。そして統一は個人から生まれる」と彼はいう。「個人」つまり芸術家の個性が具現化されるとき、初めて作品が生まれ、作中人物が造形される。作中人物に自らの思考や感情を仮託したり、レトリカルに表現することを彼は仮面という言葉に喩えている。だから、彼のかぶる仮面は、読者や観客を意識した演技やポーズといった性質をおびているのではないか。では、イェイツの仮面はどうか。そこにはたしかに演劇的要素を認めることができるが、ワイルドの仮面のように他人を意識した対他的なものだといいきれるのだろうか。本発表では、ワイルドの仮面と比較しながら、イェイツの仮面に一考察をつけ加えたい。

## エピファニーの構図—Wordsworth と Heaney—

江崎 義彦

詩人 Heaney 氏の詩的営みのなかには、多くの作家・詩人に混じって、常にイギリス・ロマン派の Wordsworth という詩人が潜在し（影響を与え）ていることは、氏自身の散文による著作・講演と限らず、その詩作品のなか（2006年の詩集 *District and Circle* に至るまで）にも読みとることが出来る。そして多くの関係批評書・研究書で、Wordsworth に言及のないものはほとんどないという有り様である。このような現状ゆえに既に陳腐の域に属するかもしれない二人の詩人の関係を、これまた陳腐の域に属する〈エピファニー〉というトピックを巡って考察する時代遅れを承知しつつ、このエピファニーを再考察するなかから、二人の詩人が、21世紀の〈神不在の時代〉のなかの〈故郷喪失者（Heidegger）〉である私たちに、どのように〈再聖化〉へ向けての示唆を与えてくれるのか、また、二人の詩人の共通項である〈住むこと（dwelling）〉という緊急の課題であった（ある）ものを、私たちはどう受け止めればよいのか、そのような局面が見えてくる筈だ。

二人の詩人に相違点も多くあることについては贅言を要さないが、互いに共通する metaphor を一つあげれば、上の〈住むこと〉と深い関係を持つ質の〈結婚〉のそれである。自然と〈私〉の結婚・・・その営みから、〈外〉と〈内〉の中間地帯に第3の現実とも呼ぶべきよりリアルな世界が誕生する。それは自然と対峙する詩人の、時には矢で射ぬかれるような痛み（例えば〈存在の未知の様式〉が突き付けられる）を覚える質の、〈見ること〉と〈聞くこと〉、そして〈回想〉行為を通して生成する世界であり、その際に眼前の世界はその相貌を変えながら、幾重もの意味の層をなす〈詩的言語〉のなかで結実する。Heidegger ならば、我が俳句にも通底するようなく現前するもの〉と〈現前すること〉の二重織れと呼ぶような世界であるが、Heaney はそれを “marvellous” と “actual” が同居する〈安息所〉 “Glanmore Sonnets” と呼ぶ。本論では、Wordsworth の “the spots of time” の一節と、*Field Work, Seeing Things* から幾つかの詩を取り上げて、その〈安息所〉に向かうことにしたい。

「Form、あるいは詩的であること：イエイツの場合」

司会・構成 長谷川 弘基

今回のシンポジウムを企画・構想する際、“Poetry: the best words in the best order”というコールリッジの言葉がいつも気になっていた。詩が「言葉を用いた（芸術）作品」であることは自明としても、詩の持つ魅力や美しさ、その特性について語ろうとすると、途端に何か捉えどころのない、「オカルト的」とさえ言っても過言ではない空気がよどむ。古代より解釈がヘルメスと結び付けられたことも当然かもしれない。

もちろん、詩の特徴や本質が何であろうと、詩を読む楽しみ、詩を創る喜びにさしたる問題は生じない。せいぜい、詩が良き神性を帯び、公序良俗に違反しないとされるときには、白昼堂々と公衆環視の下に詩を吟じることが許され、逆に、詩に悪鬼の影が見出されたとき、詩は隠れて読むしなくなり、同好の士はセクト化せざるを得ない、このような違いが派生するだけだろう。いずれにしても、詩は読まれ、創られていくことに変わりない。

しかし、文学研究、中でも詩の研究を専門とする我々としては、研究対象が正体不明の化物のままでは極めて都合が悪い。居心地が悪くなる。そこで、その正体を突き止めようと、蛍光灯の白々しい光の下、目が悪くなるまで詩集を眺め、文学史を繙き、作家の伝記を読み漁り、はては100年も前の新聞記事を掻き集める。そのうち、皮肉なことだが、自分たちが何を探し求めていたかを忘却する。仕方がないこととはいえ、研究の大方は、「詩」ではなく、また「詩人」ですらなく、あるキーワードのミッシングリンク探しに充当される。そして、詩の「研究者」は、詩の「愛好家」とは別物になり、我々研究者には詩の喜びの代わりに treasure hunter の栄誉が与えられる。これはおそらく文学が学問になってしまった代償であろう。料理でさえも学問になった暁には、きっと同じ憂き目に遭うものと信じられる。

研究が探求や追及の類義語である以上、どうにも退屈な穴掘り作業が不可避であることを認めざるを得ない。問題は、ならばどこを採掘するのか？

およそ100年ほど前、詩の批評や学問的研究が始められた頃、採掘現場は詩の中にあり、採掘坑は詩行の真上、言葉から垂直に掘り進められていた。それから次第に採掘現場は移動し、今では詩集は単なる一つの資材置場になってしまった感がある。今回のシンポジウムは、忘れ去られた過去の採掘坑を再訪する試みでもある。詩が言葉による芸術である限り、詩の秘密は言葉の間にあるはずだという目論見の下に。

パネリストの方々には「詩の魅力が派生するメカニズムを可能な限り具体的に語って欲しい」という無茶なお願いをしたにも関わらず、それぞれの立場からそれぞれ極めて根源的な問題を内包した発表を準備して頂けたと理解している。今は当日のシンポジウムが宴というに相応しい活発な意見交換の場になることを願うのみである。

## 詩人と鑑賞者

小菅 奎申

芸術を鑑賞者（研究者というより愛好者の意に解されたい）の側に立って、音楽などのパフォーマンス型と絵画などのクラフツマンシップ型に分けてみる。アーティストはどこにいるか？ 前者では一貫して現前し、後者では不在である。鑑賞者はどこにいるか？ 前者ではパフォーマンスの場に、後者では制作品が置かれている場にいる。評価の様態についてはどうか？ 前者ではその都度一回きりのパフォーマンスが評価され、後者の場合、アーティストは原則的に“完成”するまで手をかけているはずという前提で評価される。

詩の場合はどうか？ 詩人は詩を作り、不特定の鑑賞者にそれを贈る。詩は詩人を離れて行く。鑑賞者にしても、詩が作られる現場にいるわけではなく、出来上がった詩を任意の場で享受するだけである。詩人の名を記憶するために、詩人の現前を必要としない。出来栄への評価の様態については自明とする。詩はクラフツマンシップ型に属している。

しかし、詩には絵画などと決定的に異なる点がある。詩は空間の中に座を占める制作品ではなく、鑑賞者の心に座を占めていることである。この点は、同じく言語芸術である小説にもある程度通じるが、小説と異なるのは、詩は鑑賞者の心に、一字一句ゆるがせにせず、そのままそっくり“乗り移る”ことにある。この在りようには、鑑賞者が口ずさむという一種のパフォーマンスが含まれている。

詩は、詩人はクラフツマンシップを發揮し、鑑賞者がパフォーマンスして成るものである。

以上の私見は詩一般についてであり、私の報告の主要部分である。が、良い詩、すぐれた詩について、ましてイエイツの詩については何ら言及していない。これらについて述べる時間があれば、イエイツ研究者ならぬ我が身、好みの詩が即ち良い詩であると感じている愛好者として、断片的なことをいくつか申し上げたいと思う。

## 記憶の作用と repetition: *The Wild Swans at Coole* より

西谷 茉莉子

本発表では、イエイツ詩に見られる repetition について考察する。*Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics* における“repetition”の項を参照すると、この語の指すものが、「音、音節、語、語句、詩行、連、韻律の型の反復」にまで及ぶことがわかる。このように、詩の用語としての repetition とは、非常に幅広い現象を指し得るものであり、広義に捉えると、ほとんど全ての詩が repetition を含む詩であると言える。そのため、考察するにあたっては、その方法と対象を明確に定めることが必要となる。本発表で採る方法は、イエイツ詩における repetition を機能に応じて分類して、その効果を分析するというものではない。ある特定の主題と repetition との関係を明らかにすることを目的として、詩を分析するというものである。

考察の対象としては、*The Wild Swans at Coole* における、モード・ゴンについて書かれた一連の詩に注目する。具体的には、‘Her Praise’, ‘The People’, ‘His Phoenix’, ‘Broken Dreams’ を念頭に置いている。時間の制約上、全ての詩をじっくりと論じることは難しいだろうが、これらの作品の中から、具体的な例を挙げて議論を進めていきたい。これらの詩は、「モード・ゴン」について書かれた詩であると同時に、「記憶の作用」に関心が向けられた作品であると言える。そのことに留意しながら、イエイツが、「記憶の作用」という主題を扱うことに関連して repetition という形式をどのように使っているか明らかにしたい。本発表が、イエイツ詩の「主題と形式の関係」について考える材料になれば、幸いである。

## 詩の構造としての“that is”：「自我」から「無我」へ

塩田 英子

ことばには具体的な言語表現があらわす意味と、その言語表現と文脈情報の相互作用によって生み出される意味の2種類がある。詩作品の場合、前者はテキスト、後者は行間の意味、もしくは解釈ということになる。

言語学で後者を中心的に扱うのは語用論の領域である。中でも関連性理論 (relevance theory) の領域では反復がもたらす非命題効果を詩的效果 (poetic effect)、解釈の保留と一致による効果をサスペンス効果 (suspended effect) に位置づけ具体的なテキストを分析する研究もある。この点において、関連性理論は文学研究との接点が多く、テキストに対する読みの可能性を広げてくれる領域ともいえる。

本発表ではこの関連性理論の枠組みを用いて詩の「構造」をテキストの文法的・意味的な首尾一貫性 (cohesion) だけではなく推意 (implicature) のレベルでの首尾一貫性 (coherence) としてとらえる。そして、この首尾一貫性が達成される際にあらわれる効果についてみていきたい。具体的には言い換え標識 (reformulation marker) としての“or”と“that is”に関する関連性理論からの分析を手がかりに、“that is”型の言い換えと同じ効果をもたらす表現が、作品全体の流れの中で生み出す効果について分析する。

そして最後に、これらの構造が個々の作品の首尾一貫性のみならず、Yeats の詩作が晩年に至るにつれて「無我」の境地に達していくプロセスとどう関係してくるのか、読み解いていきたい。本発表により首尾一貫性の達成のされ方から見えてくる Yeats の「私」について読みの可能性を提案できれば何よりである。

マイケル・ロングリー『雪水』に見るやさしい自然の表裏：  
共生と葛藤

水崎 野里子

マイケル・ロングリー『雪水』は2004年当時の詩人を囲む生活状況がいくつか同時に織り込まれている詩集であると思う。詩集とは別に詩人はインターネットでウィックロー周辺の美しい自然の賛美を語り、環境学的な人間と自然との共生を讃美・主張していたが、それは詩集『雪水』の内容とテーマとも一致するであろう。そして本詩集はもう一つ礎石となるテーマを宿す。日本を含む東洋文化への言及と応用である。そこに理想と見る自然はやさしい。私達が「やさしい自然」という時、私達は詩人と共に生けとし生けるものがすべて何事もなく共生し得る「ノアの箱船」を想定するであろう。さらに禅文化が語る自然との一体の境地である。その境地が本詩集の語る理想でもある。

だがやはり特筆すべきことは、アイルランド詩人・ロングリーの乞い願うやさしい理想の自然とは、もはや暗黒の葛藤が何もない・すなわち「北」の暗黒が「南」の光溢れる緑によって覆い尽くされ・国境が失せる、詩人固有の「やさしい自然」を理想としていることである。その政治的な環境課題の中でそれぞれの詩が語ることは、具体的には詩人が週末を過ごすコテージの周囲の自然環境（アイルランド共和国内）の中で、毎日の生活の中で起こる出来事や出会い、鳥や動物やアイルランドの地形との関わり、その中で詩人の極めて人間的な反応と応答がきわめて人間的な属性として綴られて行く。心配や優しさや思い遣りや小さな怒りや不満、美の感嘆などが箱船の中で共に共生し合い詩人の生活として流れて行く中、究極的にそこに見るものは、だが詩人の孤独な「老い」の姿であり、鳥や動物に友人を求めつつもなにかしらの葛藤を持ってしまふ、「共生」とはいまだ行かない詩人の生活である。それを詩人はユーモアで受け入れる。詩人の周囲の小さな生き物を抱く詩人のやさしさは理想と迫る。詩人は新たに東洋的な自然との対峙を試みる。禅的な境地で暗黒の葛藤を超越しようとする。だが一方、いかに詩人が雪水で美味なる理想の茶を煎れ、雪を見ながら孤独を楽しみ禅的な境地に辿り着こうとしても、詩人の生活には老人の一人暮らしゆえの小さな葛藤は失せない。東洋的な仙人は詩人と読者の理想の中でのみ生きる。その葛藤の中で読者は1960年代のロングリーの果敢なテロ告発詩を思い出す。「老い」はエコ宣伝としてのテーマよりもむしろ雄弁に人間の自然の意味を訴える。

シェイクスピアの『リア王』の中、嵐と強風の中、裸のリアは天に怒号する。ロングリーの詩は淡々と書かれており怒号はしない。だが詩人はいまだ怒号したかったのではないだろうか？ 老いてなおやさしくない自然に、北の暗黒がいまだ生きている自然に、そして南の緑光溢れる自然に、詩人はむしろ怒れと怒号したかったのではないか？ ロングリーのやさしさは人間の理想としてある。だが暗黒から聞こえて来るロングリーの本音、老いた怒号は人間の神に対する人間の尊厳としてあるのではなからうか？ 老いてなお、ロングリーはノアの箱船の理想の共生を見ない。せめて雪水で茶を点てて老いの孤独を誤魔化し桃源郷にあこがれ続ける。

## ドルイドの受容のかたち－イエイツとブレイクの場合－

岡崎 真美

ブレイクは、従来、ドルイドを自然宗教と重ね合わせて（文学でも図像でも）否定している、というのが日本でも海外でも定説であった。が、彼の総合芸術全体から遡ってその神話を読み解くと、ブレイクは、ドルイドの善悪二面性を受容していた事が明らかである事を証明したい。ブレイクが、ドルイドを肯定していた、との解釈は、従来、殆ど皆無であったが、本発表では、新しい光をあて、彼の詩行と図像の双方から新しい解釈を試みたい。

ブレイクは、『ジェルーサレム』（1820年）という挿絵も付けた（詩行）テキストの自作版画（プレート70）で、ドルイドの三石柱の図像を描いている。また、同じプレートの詩行上で、ストーンヘンジの下に居る3人の賢者（ベーコン、ニュートン、ロック）を描き、ドルイドを暗示する「オークの森」にも言及している。これは、以前はドルイドの批判的言及と否定と解釈されて来た。しかし、肯定的に解釈することも可能である。

ブレイクの神話は、（詩行・図像共に）、以下のように要約出来る。先ず、初源に永遠界が宇宙全体の森羅万象と統一・合一して存在していた。それが、エロヒム＝ヤハウェによる創造とともに相反する二項対立に分裂して、墮落してしまった。ブレイクは、人類の救済のために、この分裂した二項対立をアポカリプス（神の天啓・啓示）によって再統一・再合一し、永遠界に人類を復帰させようとする。

以上の考察をもとにイエイツとの比較を試みたい。

## 解体と連鎖－マルドゥーンの *Maggot* について－

奥田 良二

ポール・マルドゥーンの最新詩集 *Maggot* には、これまでの彼の詩集にはあまり見られなかった、人間を含めた動植物の「腐敗」や「死」を前面に押し出した詩が多く収められている。生き物が、自然に、または事故や偶然の悲劇によって死に至るプロセスも語られている。

詩集のタイトル“*Maggot*”は、蛆虫のことであり、腐敗したものを食べて、幼虫から蛹となり、やがて成虫へと変化する。マルドゥーンの考えでは、詩人は初期のころに比べると、それ以後はより良い詩が書けなくなるという。しかし *maggot* のように、詩人や詩は、腐敗したものを糧とし解体することによって、幼虫－蛹－成虫といった連鎖を保ちながら新たな詩人や詩へと進化することができるのではないかとマルドゥーンはこの詩集の中で言っているのではないだろうか。ロンドや連句に似た形式を多用することで、詩の内容だけでなく、単純な言葉の連鎖によっても、新たな詩が生まれる可能性をも彼は探っているのである。

「Yeats における放浪」をめぐって

コーディネーター 伊達 恵理  
浅井 雅志  
虎岩 正純

今回の大会のテーマ「放浪」を念頭に置き、発表者がそれぞれ Yeats の詩作品、演劇作品からこのテーマと関連深い主人公、語り手を取り上げ、それらの作品・役柄の解釈に基づき、放浪する彼らの心情を代弁しつつ互いに質疑応答するという形を取ったワークショップを試みる。

一口に Yeats の放浪といっても、『The Wanderings of Oisín』の常若の国への旅、Crazy Jane のような宿無しの暮らしと、いくつも形態がある上、その「放浪」は、地理的な移動に留まらず、自然と超自然、若さと老い、キリスト教と異教などの諸要素における越境としても見いだされる。このワークショップでは、浅井が Crazy Jane、伊達が Oisín、虎岩が *Purgatory* の Old Man をそれぞれ担当し、常に Yeats 作品の底流にあると思われる「演劇的なもの」＝「語る」スタイルを活かしつつ、その多様なレベルの「放浪」の有り様を、登場人物同士のいわば座談会の形で再構築する。これにより、Yeats の「放浪」の含みこむオカルト的、時間的、キリスト教的、アングロ・アイリッシュ的観点をヴィヴィッドに浮き彫りにして提示するとともに、語り手が常に「私を作った人」として Yeats を念頭に置くことで、その登場人物たちを「流浪」へと駆り立てたものの正体についての理解を深め、作品の新たな切り口を見つける手がかりとなることを期する。

ある意味、Yeats の作中人物を用いた、Yeats の「放浪」をめぐる新しい戯曲の試みに近いと言えるかもしれないが、それが一人の作者（研究者）の視点や解釈によって完結するものではなく、ワークショップという共同作業によって多声的に作りあげられてゆく過程を重視したい。





日本イェイツ協会

第47回大会  
要 旨